「ゆるらか」と「ゆるゝか」

二戸　麻砂彦

一

現代日本語の場合では、穏やかで余裕のある状態を指す語として、「ゆっくりと」あるいは「ゆったりと」といったものが指摘されよう。平安時代には、「ゆるらか」と「ゆるゝか」との両語がこれに該当する。同じ意味をあらわしながら、両者の関係については不明な部分が多く、またその点に言及することもなかったようである。本稿では、これら両語を和文資料を中心に取上げて、考察を試みるものである。なお、平安時代に「ゆるやか」はいまだ現出していない。

二

『源氏物語』の若菜・下には、問題とするところの「ゆるらか」および「ゆるるか」の両語が見出される。それぞれ二例ずつを数えるが、これらは連続した場面の中で使用されており、意味の上で区別があるのかどうかに関心が集まるであろう。まず、『源氏物語大成・校異篇』[1]によって、その本文を示しておく。なお、句読点・傍線などは私見をもって付したものである。

(1)　ゆへあるたそかれ時のそらに、花はこそのふる雪思いてられて、えたもたわむはかりさきみたれたり。ゆるらかにうちふく風に、えならすにほひたるみすの内のかほりもふきあはせて、うくひすさそふつまにしつへく、いみしきおとゝのあたりのにほひ也。（若菜下・一一五〇⑭）

(2)　こうはいの御そに、御くしのかゝりはら〳〵ときよらにて、ほかけの御すかた世になくうつくしけなるに、むらさきのうへは、えひそめにやあらむ、色こきこうちき、うすゝわうのほそなかに、御くしのたまれるほと、こちたくゆるらかに、おほきさなとよきほとに、やうたいあらまほしく、あたりにゝほひみちたる心ちして、花といはゝさくらにたとへても、なをものよりすくれたるけはひ、ことに物し給。（若菜下・一一五三⑫）

(3)　さうのことは、女御の御つまをとは、いとらうたけになつかしく、はゝ君の御けはひくはゝりて、ゆのねふかく、いみしくすみてきこえつるを、この御てつかひは又さまかはりて、ゆるゝかにおもしろく、きく人たゝならす、すゝろはしきまてあいきやうつきて、りむの手なと、すへてさらにいとかとある御ことのねなり。（若菜下・一一六〇③）

(4)　わか北の方は、故大宮のをしへきこえ給しかと、心にもしめ給はさりしほとに、わかれたてまつりたまひにしかは、ゆるゝかにもひ

きとりたまはて、おとこ君の御まへにては、はちてさらにひきたまはす、なにこともたゝおひらかにうちをほときたるさまして、こともものあつかひをいとまなくつき〳〵し給へは、おかしき所もなくおほゆ。(若菜下・一一六一⑬)

右の四例は、いわゆる六条院の女楽の場面に該当し、(1)と(2)、(3)と(4)がそれぞれ近接している。一応、形容動詞の連用形と認めておくことにするが、いずれも何かの状態が「ゆったりとした」あるいは「ゆっくりとした」ことを示している。その何かが、(1)の場合は風の吹く様子であり、(2)は紫の上の髪の様子、(3)と(4)は箏の琴の弾き方・習い方である。参考として、今泉忠義氏の現代語訳[2]を掲げておこう(傍線は私意に加えた)。

(1) 趣のある夕暮時の空に、梅の花は去年の残雪を思ひ出さないではゐられないほど、真白に枝も撓むくらゐに咲き乱れてゐる。そよそよと吹く春風に、何ともいひやうのないくらゐに漂つてゐる御簾の中の薫物の香も一緒になつて匂つて、古歌ではないが、鶯を誘ふたよりにしてもいいくらゐ、御殿のあたりは大変ないい匂ひで一杯だ。(六・135⑦)

(2) 紅梅襲の御衣に御髪がはらはらとかかつてゐるのも美しく、明りに映えたお姿といつたら、この世にまたもないほどおかはいらしいのに対照して、紫の上は葡萄染だらうか、色の濃い小袿に薄蘇芳の細長をお召しで、それに御髪の溜つてゐる恰好は、多すぎるくらゐだが、それでもゆらゆらとしてゐて、おからだつきもちやうどいい大きさで、全体としてのお姿も申し分がなく、そのほんのりとしたお美しさはあたりに溢れてゐるやうな感じがするくらゐ、もしこれを花に譬へるなら、桜の花に譬へるところであらうが、やはりどんな花よりも美しく、譬へやうもないくらゐ、すぐれていらつしやる感じのするのは、やはり紫の上が格別でいらつしやるからだ。(六・138⑫)

(3) 箏の琴の弾き方では、女御の御爪音はいかにもかはいげで親しみが持て、それに母君の明石の上の御手法も加はつてゐるだけに、揺の音が心深く、いかにも澄んだやうに聞えたのだが、今度はこの紫の上のお弾きになる御手法が、また趣が変つてゆつたりとしておもしろく、聞いてゐる人もじつとしてゐられないで、そはそは浮き立つて来るほどにまでも聞き惚れがして、輪の手など、何から何まで女御とは変つて、いかにも才気のある御琴の音だ。(六・143⑯)

(4) 御自分の奥方は、亡くなつた大宮がお教へ申しあげなさつたのだけれども、身を入れて稽古もなさらなかつたうちに、大宮の手もとからお離れ申しあげなさつたので、弾き方もじつくりとは身につけてをられないといふわけで、夕霧の御前では恥かしがつて決してお弾きになることもないし、大体が何事でもただおとなしくおつとりとした風の方で、次から次へとお生まれになるお子供衆の世話をちつとの暇もなくしてをられるといふわけなので、夕霧には何の風情もないやうな感じがしないではゐられないのだ。(六・145⑤)

やはり、穏やかで余裕のある状態を意味している点が共通する。確かに、「ゆるらか」と「ゆるるか」とで意味の違いがあるとは認めがたい。現在の古語辞典のほとんども同じ意味としているが、見出し語としては別語の扱いを取っている。しかも、「ゆるるか」については〈ユルユルカの約〉あるいは〈ユルユルの転。カは接尾語〉という類の説明が多い。「ゆるらか」の方は、〈ラカは接尾語〉のような説明が散見される程度である。つまり、別語として、それぞれ成り立ちを説いているものの、明快な解答は得られずにいる。果して、両語はどのような関係にあるのであろうか、あるいは関係などないと言うべきなのであろうか。『源氏物語』の例を続けて掲げてみよう。『大成・校異篇』の本文と今泉訳を並記する。

(5) 大宮の御せうとの藤大納言のこの頭弁といふか、よにあひ、はな

やかなるわか人にて、おもふ事なきなるへし、いもうとのれいけいてんの御かたにゆくに、大将の、御さきをしのひやかにをへは、しはしたちとまりて、「白虹日をつらぬけり。太子をちたり」といとゆるらかにうちすしたるを、大将いとまはゆしとき〻給へと、とかむへき事かは。（賢木・三六二⑥）

弘徽殿の大后の御兄の藤大納言の子で頭の弁といふのは、さすがに今の世に栄えて威勢よくふるまつてゐる若者なのだが、何一つ気兼ねすることもないに違ひない、妹の麗景殿のお部屋へ行かうとすると、ちやうど源氏の前駆が低い声で先払ひをして行くところなので、暫く立ち止まつて、「白虹日を貫けり。太子懼ぢたり—源氏は朱雀帝を廃して春宮を帝位に即けやうとしてゐるやうだが、あぶないもんだ、といつたやうな意味—」と、ゆつくりとした調子で聞えよがしに唸つてゐるのを、いやまあ聞きにくいことをと、源氏はお聞きになつたが、ここで咎め立てのできる筋合ひのことだらうか。（二・170①）

(6) このゐたるおとな、「れいの心なしの、かゝるわさをしてさいなまるゝこそ、いと心つきなけれ。いつかたへかまかりぬる。いとおかしうやう〳〵なりつるものを。からすなともこそみつくれ」とて、たちてゆく。かみゆるゝかにいとなかく、めやすき人なめり。少納言のめのとゝこそ人いふめるは、このこのうしろみなるへし。（若紫・一五六⑭）

前から坐つてゐた女房の一人が、「またいつもの粗忽者が、こんないたづらをしでかして、叱られるなんて、何てまあいやなこと。そしてそれは、どこに逃げて行きましたか。いかにもかはいく段々なつて来てをりましたのに。烏でも見つけたら」といひながら起つて行く。髪はゆらりとしていかにも長く、姿も感じのいい女らしい。少納言の乳母と他の人が呼んでゐるやうだが、それは多分この女の子の世話役だからに違ひない。（一・162②）

(7) しろきあやのなよゝかなる、しをんいろなとたてまつりて、こまかなる御なをし、おひしとけなくうちみたれ給へる御さまにて、「釈迦牟尼仏弟子」となのりて、ゆるゝかによみ給へる、また世にしらすきこゆ。（須磨・四二三⑧）

軟らかな白綾の単衣（ひとへ）に紫苑色などの指貫をお召しになつて、上には色の濃い御直衣といつたおみなりで、帯も結ばないままの、うちとけたお姿で、「釈迦牟尼仏弟子云々」とお名前をおつしやつて、ゆつくりとお経をお読みになるお声が、これもまた聞いたこともないやうに美しく聞える。（三・37⑦）

(5)〜(7)の三例を加えても、穏やかで余裕のある状態を意味する点では変わりがない。ところで、(1)〜(7)は『大成・校異篇』の本文を掲出したが、これらはすべて『飛鳥井雅康筆大島雅太郎氏蔵本（いわゆる大島本）』を底本としている。ここで、諸本の異同を一覧しておく必要があろう。略号は同書の凡例に従うこととする。ただし、河内本は（　）で、別本諸本は「　」でくくり、それ以外は青表紙本を示すものとしておく。

	青表紙本	河内本	別本
(1)	ゆるらかに 大肖 ゆるゝかに 横榊池陽三明穂証	ゆるらかに 七平大鳳国 ゆるゝかに 御宮尾	ゆるらかに 阿 ゆるに 保
(2)	ゆるらかに 大三	ゆるらかに 七平大鳳国	ゆるらかに 保阿

	(3)	(4)	(5)	(6)	(7)
ゆるゝかに 横榊池陽肖明穂証	ゆるゝかに 大横榊池陽三明穂 ゆるらかに 肖証	ゆるゝかに 大横池陽肖三明穂 ゆるらかに 榊証	ゆるらかに 大 ゆるゝかに 榊池肖三証 ゆるゝらかに 横 ゆる□かに 穂	ゆるゝかに 御大横榊池肖三明 穂証	ゆるゝかに 大横池飯肖三証
ゆるゝかに 御宮尾	ゆるゝかに 御七宮尾平大鳳国	ゆるゝかに 御七宮尾平大鳳国	ゆるらかに 宮 ゆるゝかに 七平大尾	〈コノ部分ナシ〉 七宮尾大鳳	ゆるゝかに 宮尾平 ゆるらかに
	ゆるゝかに 保阿	ゆるゝかに 保阿	ゆるらかに 国 ゆるゝかに 御陽相	ゆるらかに 麦阿 〈コノ部分ナシ〉 陽中	ゆるゝかに 御陽麦阿穂

七大

右の表には、『大成・校異篇』以外に、証・穂・明・中などの略号を補足してある。これらは、『宮内庁書陵部蔵三条西家本』(3)『穂久邇文庫蔵本』(4)『伝明融等筆本』(5)『中山輔親氏蔵本』(6)を指している。さて、一見して気づくことは、「ゆるゝか」が多いという点である。青表紙本では、大島本が(1)・(2)・(5)の三例に「ゆるらか」という表記を見せているのが目立つ程度で、やはり「ゆるゝか」が多いと認められる。しかも、(5)の場合では、横山本のように「ゆるゝらかに」と書写したが、「ら」をミセケチとした例に注目が集まる。これは「ゆるゝか」を正しい表記と考えていたことになり、横山本は(1)～(7)すべてが「ゆるゝか」の例としてよいだろう。ミセケチがなければ誤写と判断されるところである。おそらく、踊字「ゝ」と「ら（字母は良）」の草体とが書写上混同しやすいためであろうと推測される。(7)書写の状態を知るために、証の宮内庁書陵部蔵三条西家本および陽明文庫本の当該例を掲げる。

宮内庁書陵部蔵三条西家本

(1)

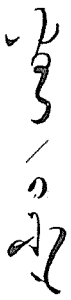
（若菜下・83②）

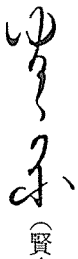
(2)

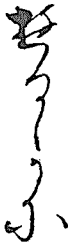
（若菜下・92④）

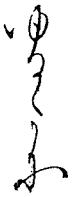
(3)

（若菜下・112①②）

(4)

（若菜下・117④⑤）

(5)

（賢木・86④）

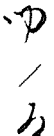
(6)

（若紫・18③）

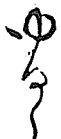
(7)

（須磨・72③）

陽明文庫本

(1)

（一〇・76⑨）

(2)

（一〇・84⑦⑧）

(3)

（一〇・102⑪）

(4)

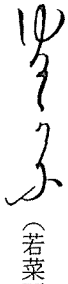
（一〇・107⑧）

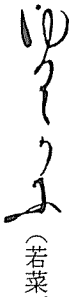
宮内庁書陵部蔵三条西家本では、(3)・(4)が「ゆるらか」である他は皆「ゆるゝか」という表記を見せている。以下に示した陽明文庫本や（高松宮家本）の影印をも参看すれば明らかなように、一般に踊字「ゝ」は書写上そこで筆を一時止めるようである。いわゆる連綿体が切れ、多少の余白を置いて次の字へと書き進められて行く。よって、踊字が少々長めに書かれてあっても、あるいは幾分か弧を描くように曲線を作ってあっても、そこで一時切れている場合には、「ら（良）」の草体ではなく、踊字である蓋然性が高いと考えられる。それにしても、先の宮内庁書陵部蔵本の(3)・(4)は行末であるために、一時止めたのかどうか不明である。一応「ゆるらか」としておく。陽明文庫本の場合は、(1)～(4)が青表紙本と考えられ、いずれも「ゆるゝか」という表記をとる。しかし、注意深く観察すると、(2)や(3)の踊字は(1)や(4)のそれに比して長めであり、あるいは「ら（良）」の草体と紛れやすいとも言えそうである。やはり、踊字と「ら（良）」の草体とは混同を起しやすく、誤認による書写の可能性を有していると認められる。河内本でも、「ゆるゝか」は目立つ。なお、『大成・校異篇』は「ゆるらか」という大島本を底本としているので、(1)・(2)のように河内本に異同がないということは、やはり「ゆるらか」であるということになる。ところが、管見の及ぶ限りにおいて、（御物本）[8]（高松宮家本）[9]（尾州家本）[10]は(1)・(2)ともに「ゆるゝか」である。他の五本、（七亀源氏）（平瀬本）（大島本）（鳳来寺本）（国冬本）は未確認であるが、疑義を残している。今は（高松宮家本）を掲出しておく。

（高松宮家本）

(1)

（若菜下・28オ⑤⑥）

(2)

（若菜下・31ウ①）

(3)

（若菜下・38オ⑤）

(4)

(若菜下・40オ②)

(5)

(賢木・39オ②③)

(6)　〈コノ部分ナシ〉

(7)

(須磨・34オ④⑤)

右のうち、(4)は「ら(良)」の草体と誤認される場合を完全には否定できない微妙な書写である。(5)だけが「ゆるらか」と表記されているが、あるいは「ゆる」の次で改行したことによる誤認かもしれない。別本諸本の方は、「ゆるらか」「ゆるゝか」両表記が混在している。[11] 次に〔陽明文庫本〕[7]を掲げておく。

〔陽明文庫本〕

(5)

(三・41オ②)

(7)

(四・40オ③④)

(5)の例も、「ゆるゝか」の踊字がやや長めであるが、前行の「日をつらぬけり」の「ら(良)」の草体と比較すれば、やはり踊字であると認められる。(7)は判別しにくいのであるが、「ゆるゝか」であろう。

以上見てきたように、『源氏物語』各諸本では「ゆるらか」と「ゆるゝか」とが混在しているが、多く見出されるのは「ゆるゝか」であると言えよう。また、両表記には意味上の区別があるとは考えにくいようである。

三

『源氏物語』以外の和文資料の状況を確めておこう。まず、『紫日記』[12]の例を掲げる。傍線・句読点は私に付した。

(8)　中つかさのめのと、宮いたきたてまつりて、御ちやうのはさまより、みなみさまにゐてたてまつる。こまかにそい〳〵しくなとはあらぬかたの、たゝゆるゝかに、もの〳〵しきさまうちして、さるかたに人をしつへく、かと〳〵しきけはひそしたる。ゑひそめのおり物ゝ、こうちき、むもんのあを色に、さくらのからきぬきたり。(宮内庁書陵部蔵黒川本・下41ウ⑦)

(8)の「ゆるゝかに」も、穏かで余裕のある様子を意味していると考えられ、『紫式部日記全注釈』[13]では「ゆったりと」のやうに訳している。ここも本文の異同が存在するので、『紫式部日記絵詞』[14]本文、『紫式部日記傍註』[15]本文、『紫式部日記釈』[16]本文、を一覧する必要があろう。

黒川本	絵詞本文	傍註本文	釈本文
ゆるゝかに	ゆるゝかに	ゆるやかに	ゆるらかに

『紫日記』の場合は邦高親王筆本系統の諸本が圧倒的多数を占めている

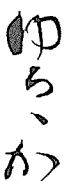
にもかかわらず、これらとは別系統とされる黒川本を善本と評価している。また、絵詞本文にも「ゆるゝか」とあり、これを補強していると言えよう。

次に『かげろふ日記』[17]を取上げる。これも「ゆるゝかに」と表記されており、「ゆったりと」の意と解される。明らかに踊字であることが知られる。

(9) あくれは二月にもなりぬめり。(中略)おきいてゝ、なよゝかなるなほし、しをれよいほとなるかいねりのうちきひとかさねたれなから、おひゆるゝかにてあゆみいつるに、人〳〵御かゆなとけしきはんめれは、れいくはぬものなれは、なにかはなにゝと心よけにうちいひて、たちとくよとあれは、大夫とりてすのこにかたひさつきてゐたり。(宮内庁書陵部蔵桂宮本・下5③)

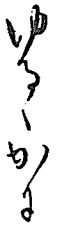
第四の和文資料として、『更級日記』[18]を参看しよう(傍線・句読点は私意)。定家筆御物本には「ゆるゝかに」とある。これも踊字であること明白である。

(10) 時にしたかひ見ることには、春かすみおもしろく、そらものとかにかすみ、月のおもてもいとあかうもあらす、とをう、なかるゝやうに見えたるに、琵琶の、ふかうてうゆるゝかにひきならしたる、いといみしくきこゆるに、又、秋になりて、月いみしうあかきに、そらはきりわたりたれと、手にとるはかりさやかにすみわたりたるに、かせのをと、むしのこゑ、とりあつめたる心地するに、箏のことかきならされたる、ゐやう定のふきすまされたるは、なその春とおほゆかし。(定家筆御物本・126⑧)



第五には、『落窪物語』[19]の該当例を示す(傍線・句読点は私意)。表記は「ゆるゝかに」であり、「ゆったりと」というような余裕のある様子を意味する。尊経閣文庫本[20]以外の諸本の異同も併せて、次に掲出する。九条本、宮内庁書陵部本甲[21]、斑山文庫本[22]を取上げてある。

(11) 女君ははりなうくるしと思ひふし給へり。あこき、いときよけにさうそきて、いときよけにけさうして、帯ゆるゝかにかけてまいるうしろて、かみ長に三尺はかりあまりて、いとおかしけなりとたちはきもみをくる。(尊経閣文庫本・上67⑥)

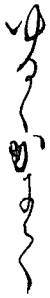


九条本	書陵部本甲	斑山文庫本
ゆるゝかに	ゆるゝかに	ゆるゝかに

第六の資料として、『浜松中納言物語』[23]の例を掲げる(傍線・句読点は私意)。(12)・(13)ともに、穏やかで余裕ある状態を意味している。ただし、表記上の異同が著しい。[24]併せて掲出する。

(12) 中将のめのとは、わかきみくしたてまつりて、ことふねにてのほる。心しらぬ人は、いみしう思きこえけるきみかなと、ことはりにあはれかりけり。のほりつき給ぬれは、中将のめのとは、さぬきのかみなりし人のめにてありしかとも、かみもなくなりしかは、やもめなれとも、むすめともあまたひろきいへにすみみちて、うち〳〵は、なをそのなこりゆるゝかにてある人なれは、わかきみくしたて

まつりて、さとにそいそきおちつきにける。(国立国会図書館蔵本・二57①)



ゆるらかにて　不二文庫蔵三条実助相伝本(不)
ゆるかにて　前田育徳会尊経閣文庫蔵本(前)
京都大学国文学研究室蔵小山文庫旧蔵本(小)
ゆたしかにて　静嘉堂文庫蔵本居春庭筆本(居)
ゆるしかにて　松本市立図書館蔵春廼屋旧蔵本(春)

(13)　うしろめたうかへりみかちにて、泪おちつゝ、いまよりはかやうに侍へけれ、たいめんおほつかなかるへきにもあらすなときこえ給て、日しりに、ゆるゝかにてすくすへきさまに、をきて給てかへり給を、(国立国会図書館本・三35⑧)

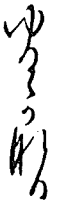
ゆるゝかにて　不二文庫蔵三条実助相伝本(不)
ゆるらかにて　静嘉堂文庫蔵日尾荆山筆本(荆)
東京教育大学図書館蔵本(育)
京都大学国文学研究室蔵岡本保孝書入本(保)
ゆるしかにて　東京教育大学図書館蔵本(教)
ゆたしかにて　東京教育大学図書館蔵横山由清校合本(由)

『浜松中納言物語』の場合、その書写本は近世以降のものであり、本文の整定には困難な課題を抱えることが多い。(12)・(13)の両例も、「ゆるらか」「ゆるゝか」以外に「ゆるか」「ゆたしか」「ゆるしか」などの異同が存在する。「ゆるか」は踊字を脱してしまったと考えられる。「ゆたしか」は「る(留)」の草体を「た(多)」の草体と誤認し、さらに踊字「ゝ」を「し(之)」の草体と見誤った表記であろう。「ゆるしか」の「し」も同様である。とすれば、これらの異文はすべて「ゆるゝか」を誤認して伝えた表記となり、やはり「ゆるらか」と「ゆるゝか」の両表記に集約される。ところで、『校本浜松中納言物語』[24]によれば、(12)は**前・小・居・春**以外の諸本すべて底本とした**不**の「ゆるらか」と同じであることになる。しかし、国会図書館本の影印を見れば、明らかに「ゆるゝか」であり、他本についても疑いを禁じ得ない。

第七の和文資料は『枕冊子』である。この資料も本文の異同が著しく、本文の整定[25]には困難な状況が待ちかまえている。そこで、いわゆる伝能因所持本[26]によって例を掲げ、その異同を三巻本・前田本により示すこととする(傍線・句読点は私に付した)。

(14)　宮の御前の御木丁をしやりて、なけしのもとにいてさせ給へるなと、たゝ何事ともなくよろつにめてたきを、さふらふ人もおもふ事なきを心ちするに、月日もかはりゆけともひさにふるみむろの山とみやたかくといふ事を、ゆるゝかにうちよみいたしてゐ給へる、いとおかしとおほゆるけけにそちとせもあらまほしけなる御ありさまなるや。(学習院大学蔵伝能因所持本・上28⑪)

(15)　そはのかたにかみの打たゝなはりて、ゆるゝかなるほと、なかさをしはかられたるに、(同・上69⑤)



	(14)	(15)
伝能因所持本	ゆるゝかに	ゆるゝかなる 十三ゆるゝなる 慶ゆらゝかなる
三巻本	ゆるらかに 弥ゆるゝかにトモヨマル 勧中ゆるゝかに 古ゆるゝかに（らカ）	ゆるらかなる 弥刈勧中ゆるゝかなるトモヨマル
前田本	ゆるゝかに	ゆるらかに ゆるゝかにトモヨマル

(14)・(15)ともに「ゆったりと」した余裕のある状態を意味している。しかし、その表記は異同が著しく、概して伝能因所持本および前田本が「ゆるゝか」であるのに対して、三巻本は「ゆるらか」となっている。その三巻本も諸本によっては「ゆるゝか」とも読めそうである。やはり、これは踊字「ゝ」と「ら（良）」の草体が誤認されやすいことによるものと考えられる。前田本の(15)の例もそうであろう。

以上、二・三においては、平安時代の和文資料に見える「ゆるらか」および「ゆるゝか」を一覧してみたわけである。その(1)～(15)の例は、いずれも穏やかで余裕のある状態を意味していることが知られる。全般的には「ゆるゝか」という表記が目立つのであるが、一方「ゆるらか」も少くはない。果して、両語の関係は近似した字形による誤認というだけで解答が得られるのだろうか。

四

そこで視点を変え、古辞書・訓点資料などを参看してみたい。古辞書では観智院本『類聚名義抄』[27]と前田家本『色葉字類抄』[28]とに「ユル、カ」の例が発見される。

(16) 奢（舒邪反 オ（平）コ（平濁）ル ホ（上）コル トヲシ ユル、カナリ オソル ユルス シ）（観智院本類聚名義抄・仏下末440⑥）

(17) 婥（ユル、カ）（前田家本色葉字類抄・下68ウ⑤・由部辞字）

また、『九条本文選』[29]にも次のような例が見出せる。ただし、加点年代が康和元（一〇九九）年から正慶二（一三三三）年に及んでおり、必ずしも等質の訓点とは言えないが、いわゆる文選読みとして古くから保持されてきたものである。

(18) 忽（トテ ユル、カニシテ）（535下②）

(19) 綽（ユル、カナル ユタカナル 婥決 ユル、カナル）（538下④）

(20) 粉披（ト ユル、カニシテ）（487下⑨）

(16)～(20)における和訓はすべて「ユル、カ」という片仮名表記であるから、踊字「ゝ」と「ラ」を混同することは原則としてあり得ないことである。管見の及ぶ限り、他の平安時代の古辞書・訓点資料には類例がないようであるから、「ユルラカ」という表記はなく、「ユル、カ」のみであることになる。そこで、まず「ゆるゝか」に注目して考えてみよう。(16)では、掲出

字「奢」に対して「ユル、カナリ」という和訓が付されているのであるが、他に「ユルス」という和訓のあることに気づく。これは「許す」「緩す」などと解釈されようから、「ゆるゝか」と何らかの関連があるのではないかという想定が浮びあがる。すなわち、「ゆるゝか」という語の成り立ちについてである。先に二で述べたごとく、現在の多くの古語辞典では「ユルユルカの約」あるいは「ユルユルの転。カは接尾語」のように説明をする。これが正しいかどうかは別としても、「ゆるゝか」からは動詞の「許す」「緩す」や形容詞「緩し」と共通の語根 root である「ゆる」を抽出できる。この「ゆる」を重ねた「ゆるゆる」に接尾辞 suffix「と」を加えた「ゆるゆると」が派生している。『大成・校異篇』によって(21)を示す（傍線・句読点は私意）。

(21)　たけたちそゝろかにものしたまふに、ふとさもあひて、いとしうとくに、おもゝち、あゆまひ、大臣といはむにたらひたまへり。ゑひそめの御さしぬき、さくらの下かさね、いとなかうはしりひきて、ゆる〳〵とことさらひたる御もてなし、あなきら〳〵しとみえたまへるに、（行幸・八九六⑭）

この「ゆるゆると」は用例が極めて少なく、もう一例『枕冊子』から掲出しておく。先に同じく伝能因所持本[25]による。

(22)　あしろははしらせたる。人の門よりわたるを、ふとみるほともなくすきて、ともの人はかりはしるを、たれならんとおもふこそおかしけれ。ゆる〳〵と行はいとわろし。（伝能因所持本・上55②③）

(21)・(22)のように、語根「ゆる」を重ねた「ゆるゆると」は存在するのであるが、だからと言って、「ゆるゆるか」を想定してもよいのであろうか。この「ゆるゆるか」が転じて「ゆるるか」という語が成立したと説明するならば、「ゆるゆると」も「ゆるゝと」になったはずである。少なくとも、その可能性があるはずであるから、どこかに「ゆるゝと」なる語が見つけられそうである。しかし、実際には存在しない。すなわち、「ゆるゝか」の成立については別の説明をする必要があると言える。一般に、接尾辞に「か」を有するナリ活用の形容動詞は次のような語構成をもって派生したと考えられる。[30]

(A)　語根＋か
(B)　語根＋ら（ろ）＋か
(C)　語根＋や（よ）＋か

当面(C)は問題とならないので、(A)と(B)とについて、『源氏物語』に見える該当の形容動詞の見出し語を一覧しておこう。

(A)		(B)
あえか	なよびか	あからか
あさはか	にはか	あきらか
あてはか	のどか	あららか
あはつか	はつか	うすらか
あるかなきか	はやりか	うららか
いささか	はるか	おいらか
いへばおろか	ひぢちか	かはらか
おくふか	ふつつか	かるらか
おほどか	ほこりか	かろらか
おもひほのか	ほのか	こころやはらか
おもりか	みそか	さはらか
おろか	みやびか	たひらか
おろそか	ものしづか	なだらか
かごか	ものほこりか	なよらか
かすか	ゆくりか	にくらか

かごちか	ゆたか	ぬるらか
こころしづか	ゆほびか	のびらか
こころのどか	ゆるるか	ふくらか
こまか	わづか	ほがらか
さだか		まろらか
さやか		ものうららか
したたか		ものやはらか
しづか		やすらか
そそろか		やはらか
そろか（ドロカ）		ゆるらか
たしか		わららか

(A)・(B)の諸例から、その語根となっているものは、形容動詞語幹・動詞語幹・形容詞語幹あるいは語根そのものなどであることがわかる。(A)に所属する「ゆるゝか」は、「ゆるす」「ゆるし」などと共通する語根「ゆる」から成立したと考えたいのであるが、先に述べた理由で、「ゆる」を重ねた「ゆるゆる」が転じて「ゆるゝ」となったとは言えないのである。一方、(B)に分類された「ゆるらか」については、形容詞や動詞の語幹である「ゆる」を語根として接尾辞「らか」が付いたものであることが認められる。ところが、「ゆるらか」（／jururaka／）は、第一・二音節にゥ列音が連続し、隣接した第三音節の／ra／を同じゥ列音の／ru／に同化 assimilation を起しやすい音結合であることがわかる。よって、「ゆるらか」が成立して間もなく「ゆるゝか」／jururuka／となったのであろう。二・三に見た和文資料で「ゆるゝか」が多く見出されたのは当然である。にもかかわらず、踊字「ゝ」と「ら（良）」の草体が近似していて誤認されやすいため、少数ながら「ゆるらか」という表記も出現することになったのである。結果としては、誤認による仮名表記をもって、「ゆるらか」が回帰したことになる。

五

以上を要すれば、平安時代の和文資料に散見される「ゆるらか」「ゆるゝか」の両語は、次のような関係であると認められる。

Ⅰ　語の成立から考えると、「ゆるらか」の語構成は、形容詞「ゆるし」や動詞「ゆるす」などの語幹「ゆる」を語根として、これに接尾辞「らか」が付いたものである。

Ⅱ　「ゆるらか」成立後間もなく、同化による音変化を起し、「ゆるゝか」の語が生じた。

Ⅲ　しかし、仮名表記上、踊字と「ら（良）」の草体とは誤認しやすいため、「ゆるゝか」も回帰する結果となった。両語が併存しながらも同じ意味で使われているのはそのためである。なお、誤認の起きようがない片仮名表記では「ユル、カ」だけしか見られない。

［注］

（1）　池田亀鑑編著『源氏物語大成』（中央公論、上製本八冊・昭和二八～三二年、普及版一四冊・昭和五九～六〇年）によった。また、『源氏物語（全）』（桜楓社、昭和五二年）を参照した。

（2）　今泉忠義『源氏物語現代語訳』（桜楓社、昭和四九～五〇年、一〇冊）。括弧内は同書の所在を、巻・頁・行の順で示す。

（3）　『青表紙本源氏物語』（新典社、昭和四三年、五六冊）の複製による。略号の証は、阿部秋生『源氏物語の本文』（岩波書店、昭和六一年）において用いられている。同書の四〇・八八頁など参照。なお、『宮内庁書陵部蔵三条西実隆奥書本』という呼び方もある。

（4）　日本古典文学影印叢刊3『源氏物語』（日本古典文学会、昭和五四～五五年、五冊）の複製による。

(5) 東海大学蔵桃園文庫影印叢書『源氏物語（明融本）Ⅰ・Ⅱ』（東海大学出版会、平成二年、二冊）の複製による。該当例(1)～(4)。
実践女子大学文芸資料研究所『別冊年報Ⅰ』（平成元年）の翻刻による。同書は、空蟬・夕顔・若紫・末摘花・紅葉賀の各巻が収められており、本稿の(6)に若紫の該当例を見出す。その凡例に「可能な限り原本の様態を復元し得るように翻字することを目的とする」という点に期待し、続刊を望む。

(6) 『中山輔親氏蔵源氏物語』（日本古典文学会、昭和四六～四七年、七冊）の複製による。

(7) 陽明叢書国書篇第一六輯『源氏物語』（思文閣出版、昭和五四～五七年、一六冊）の複製による。

(8) 『東山御文庫蔵源氏物語（各筆源氏）』（古典文学会、昭和六一年）の複製による。

(9) 『高松宮御蔵河内本源氏物語』（臨川書店、昭和四八年、一二冊）の複製による。丁数が付されていないため、本文の書出しを第一丁として数えた。

(10) 『尾州家河内本源氏物語』（武蔵野書院、昭和五二～五三年、五冊）の翻刻による。

(11) 別本の(1)・(2)についても、河内本のそれらと同様にして、「ゆるらか」とする〔阿里莫本〕〔保坂本〕には疑義が残る。大島本の「ゆるらか」を底本としているため、異同がないとする別本諸本は「ゆるらか」ということになろう。しかし、河内本の（御物本）（高松宮家本）（尾州家本）が「ゆるゝか」の誤りであったように、別本も再確認が必要である。ただし、〔阿里莫本〕〔保坂本〕を未だ確認しておらず、保留にせざるを得ない。我々は『大成』によって大きな益を享受しているのであるが、やはり、その誤認は少しずつながらも訂正して行く努力がなされるべきであろう。なお、別本諸本を集成してその異同を掲げた労作が刊行中である。(5)～(7)の別本には、これを参照して補っている。残念ながら、(1)～(4)については未刊部分のため参看することができなかった。早期の完結を望むところである。

(12) 『源氏物語別本集成』（桜楓社、平成元～二年、第一～三巻）による。

(13) 『黒川本紫日記』（笠間書院、昭和四七年、上下二冊）に影印された宮内庁書陵部蔵黒川本による。

(14) 荻谷朴『紫式部日記全注釈』（角川書店、昭和四六・四八年、上下二冊）の下・四三九⑮。

(15) 日本の絵巻9『紫式部日記絵詞』（中央公論社、普及版・昭和六二年）、日本古典文学全集18『和泉式部日記・紫式部日記・更級日記・讃岐典侍日記』（小学館、昭和四六年）所収の『復元紫式部日記絵巻』（五〇六～五二八頁）の写真・翻刻による。

(16) 壺井義知『紫式部日記傍註』（享保一四年）は、国学院大学蔵の二種（京都石清水社士谷村光義版・文政四年補刊大阪河内屋儀助版）による。

(17) 清水宣昭『紫式部日記釈』（天保四年）は、『紫式部日記古註釈大成』（日本図書センター、昭和五四年）所収の再刊本（文政一三年）の翻刻による。

(18) 『桂宮本蜻蛉日記』（笠間書院、昭和四四年、上中下三冊）に影印された宮内庁書陵部蔵桂宮本による。

(19) 『定家筆御物更級日記』（笠間書院、昭和四七年）に影印された定家本による。

(20) 『おちくぼ』（古典文庫261・263、昭和四四年、上下二冊）に複製された尊経閣文庫本による。

(21) 吉田幸一編著『九条本をちくぼ』（新典社、私家版「古典聚英」4、昭和六一年）による。巻一・18ウ⑤。

(22) 『落窪物語』（角川文庫、昭和四六年）において底本とされた宮内庁書陵部本甲による。

(23) 『斑山文庫旧蔵落窪物語』（笠間書院、昭和五八年、四冊）に影印された斑山文庫本による。巻一・70①。

(24) 『国会図書館蔵・浅野図書館蔵　浜松中納言物語』（笠間書院、昭和四七年）に影印された榊原家旧蔵国立国会図書館蔵本による。
小松茂美『校本浜松中納言物語』（二玄社、昭和三九年）を参照した。諸本の略号は同書に従った。なお、不は同書の底本である。

(25) 『能因本枕草子』(笠間書院、昭和四六年、上下二冊)に影印された学習院大学蔵伝能因所持本による。

(26) 田中重太郎編著『校本枕冊子』(古典文庫、昭和二八～三二年、三冊)、同『校本枕冊子総索引』(古典文庫、昭和四四年～四九年、二冊)による。

(27) 天理図書館善本叢書32～34『観智院本類聚名義抄』(八木書店、昭和五一年、仏法僧三冊)の複製による。

(28) 『尊経閣蔵三巻本色葉字類抄』(勉誠社、昭和五九年)の複製による。

(29) 中村宗彦『九条本文選古訓集』(風間書房、昭和五八年)による。

(30) 沖森卓也『ナリ活用とタリ活用』(国文法講座2『古典解釈と文法―活用語』所収、明治書院、昭和六二年)の219～227頁を参照。この中では「語基」という術語を用いているが、これは共時態における語構成の基本的要素として定義されるのが一般であり、用語の混乱を避けるため、「語根」を用いた。